

【体験版】女体化戦闘訓練所。小説版

話は数日前にさかのぼる。

僕が住んでいる街の防衛を一手に引き受けている天才女騎士・レナからこんな誘いを受けたのだ。

「実はわたし、もっと街のみんなを守れるようにしたいって想いがあるって...ちょっと大がかりなものを作ってるんだ。

できればいいんだけど...きみにその作っているものを少し試してもらいたいんだよね。」

特に断る理由もないし別に大丈夫だろう。

そう思い、僕はこの頼みを快諾した。

そうして今、目の前にある建物を眺めているところである。

「レナ、君がこの前話してくれた「例のもの」ってこれのことかい？」

僕は建物の入口に立つレナに問いかける。

「よく来たね。ここはわたしが試しに作ってみた訓練所だよ。

きみが必要なら、今からこの訓練所の基本的な仕組みを教えるけど、聞きたい？」

さすがに、概要を何も知らずに挑むわけにはいかない。

とりあえず、まずは聞いてみよう。

「この訓練所には色々な敵や仕掛けがあって、自分の頭を使ってこれらを乗り越えていくのが目的だよ。

あくまでも訓練だから、仮に失敗しても基本的にけがなどの心配はないから安心してね。」

そうなのか。それなら多少は安心だ。

レナは続ける。

「この他にも、施設の中でちょっとだけ注意事項があるからよろしくね。

大丈夫？いけそう？」

ここまで聞いておいて「やっぱり無理です」はないだろう。

もちろん、僕はOKを出す。

「よし！じゃあ、気を付けて行ってきてね！」

レナの言葉に見送られて、僕は早速訓練所と称する建物の中に入っていくのだった。

建物の入口には、何やら水晶のようなものが置かれている。

僕がその水晶に近づくと、突然メッセージが再生されたのだ。

「この訓練自体は比較的安全に配慮した上で行われますが、時折あなた自身が、他人には言えないような恥ずかしい経験をする...かもしれません。

それでも挑みますか？」

その言葉を聞いて、僕は少し身震いする。

「えっ、それはちょっと心配かも。でも、多少の興味はあるんだよな。

ここはやはり...」

「挑む」

そう、僕は決めたのだ。

「確認しました。それでは次へお進みください。」

メッセージが再生されると、水晶が消えて先に進めるようになる。

僕は建物の奥へと足を進め、その先にあるもう一つの水晶に近づく。

すると、

「それでは訓練開始です、お気をつけて行ってらっしゃい！」

とメッセージが再生され、突然まぶしい光が僕に向かって降り注いだのだ。

急に意識が遠くなる。

僕が目覚めた場所。そこでは…。

「いたた…ここはどこだろう？」

花の香りがほのかに鼻につく。

目を覚めた場所は、とある部屋の一室。

しかし、その部屋はどうやら牢屋になっているらしく、一面に鉄格子がはまっている。

「…ん？」

いつもと声が違うような気がする。それに、髪が腰のあたりまで伸びている？

僕は視線を正面から下へ向ける。すると、胸には2つの膨らみが見える。

…これは間違いない。

どうやら、今の僕は女になっているようだ。

しかし、戦闘訓練でこんなことする必要があったのだろうか…

僕はそう思い、この部屋の謎を解くべく動き始めたのだった。

牢屋の中を軽く見渡す。

すると「置き手紙」「ベッド」「本棚」の3つが目にとまった。

どれから調べていこうかと少し迷ったが、僕...いや、私は机の上に置かれている置き手紙から調べていくことにした。

わざとらしい場所に置かれてある置き手紙。

その手紙には、このようなことが書かれていた。

【戦闘訓練所のルールについて】

この訓練所では、あなたは「少女剣士・アリス」として振る舞ってもらいます。

訓練中に女の子のような言葉遣いや立ち振る舞いをする必要はありませんが、謎解きや敵との戦いで立ち回りを誤ると、人には言えないような恥ずかしい目に遭わされてしまう...かもしれません。

それでは、参加者であるあなたの健闘を祈ります。

まずは、この部屋の謎を解いて脱出を目指してください。

「なるほど、最初の注意事項で言ってたのはそういうことだったのか...。まあ、やるしかないか。」

私はそう思い、次は手紙が置かれた机の隣にあるベッドに目を向けることにしたのだった。

手紙が置かれた机の隣に、気持ちよさそうなベッドが置かれている。

ちょっと疲れていたこともあり、私はなにも考えずにそのベッドに横になる。

...しかし、ベタな展開かもしれないが、このベッドは罠だったのだ。

わたしがベッドに寝転がった数秒後。

突然、ベッドの下から植物のツタのようなものが出てきて、わたしの身体に絡みついてきた！

「きゃっ...えっ、なにになに！？」

あっという間に、ツタはわたしの手足に絡みついて動きを封じてしまう。

逃げ出そうとしてももう遅い。

「くそっ...しまった、これは罠だったんだ。でも、この状況じゃどうすることも...」

状況はどんどん悪化する。

ツタで手足の動きを封じるだけでは飽き足らず、今度は触手のようなものまでベッドの下から伸びてくる。

そして、その触手はわたしの着ている服のすき間やスカートの下に入り込んできたのだ。

これから自分が受ける「お仕置き」を知り、絶望する。

「ひいいいっ！

いやあ、それは勘弁してええ！！」

泣きわめいても、このお仕置きが止まるはずがない。

わたしの身体に入り込んできた触手が乳首とお尻の穴に伸びてきたかと思うと、ゆっくりと、ねっとり刺激してきたのだ。

「ひっ、ひゃああ...あひっ！

ひうう...あああ！ やらあああ！」

わたしはベッドの上で身体をバタつかせて抵抗する。

...当然、無駄なあがきなのだが...

前後の弱点を同時に責められて、失神しそうだ。

「あああああ...ひいいい...うああああああ！！」

結局、わたしはみっともない鳴き声を出して
失神してしまったのだ。

「んんっ...？」

目を覚ました場所は、どうやらわたしが最初にこの部屋に来たところと同じのようだ。
衣服などは綺麗に整えられている。
...すると、どこかからレナの声が聞こえてきた。

「こら——っ！！

きみ、本当に訓練する気あるの??

...こんな簡単な罠に引っかかるなんて情けないよきみ...泣きそうだよわたし...」

おそらく、簡単な通信系の魔術を使っているのだろう。

確かにみっともないところを見せてしまったので、とりあえず(伝わるかはわからないが)レナに一声かけておくことにしよう。

「えっと...ごめんなさい。

次からはもっと慎重に取り組むよ。」

「んー...以後、気を付けるようにね?まったく...」

とりあえず、謝罪の言葉は伝わったようだ。

気を取り直して、謎解きを再開することにしよう。

わたしが次に部屋を見渡して目に入ったのは本棚だ。

本棚には剣術や魔術の専門書がたくさん並んでいる。

...とそこに、本の間にメモ用紙が挟まっているのを見つけた。

【メモ用紙の内容】

ベッドを しらべて みなさい

ただし やすんでは いけない

「休んではいけない」だと...？ベッドは身体を休めるためのものでは？」

メモ用紙を見て、わたしは至極当然な疑問を浮かべる。

再び、あの忌まわしきベッドに立つ。

そのベッドの下を見ると、なんといかにも拾ってくださいと言わんばかりの場所に鍵が置かれていたのだった。

おそらく、これが牢屋を開ける鍵なのだろう。

先ほど拾った鍵で牢屋の扉を開けてみると、予想通りあっけなく扉は開いた。

これで最初の謎解きは完了だろう。

...とそこに、無造作に宝箱が置かれているのが目に入った。

「罨っぽい雰囲気はなさそうだし...開けてみよう。」

わたしは恐れることなく、この無造作に置かれた宝箱を開けてみた。

すると、中に入っていたのはこの訓練所のために用意された、練習用の剣と盾だったのだ。

中には説明文のメモ書きもある。

【メモ書きの内容】

この先では、実際に敵と戦う場面も出てきます。

この宝箱に入っている剣や盾を使って、あなた自身の力で敵を倒してください。

健闘を祈ります。

「まあ、「戦闘訓練」なんだしそりゃ戦う場面もあるよね。

よし、この先も頑張ろう！」

宝箱に入っていた練習用の剣盾セットを回収し、次の部屋へと駒を進めるわたし。

さて、この先にはどのような仕掛けが待っているのだろうか…。

【サンプルはここまでとなります。】